

町雑誌 千住

SENJI

特集 ■ 千住の肖像

PART I

VOL.
17



頒価
300円

連載 ■ 新・千住人スケッチ③ ■ 千住明治の女伝⑦ ■ 千住蔵の町⑩ ■ 千住を語る②
■ 千住タイムトラベル⑧ ■ 千住に似た町④ ■ 千住いまつけの店④
新連載 ■ 千住の思い出①

MACHI-ZASSHI SENJU

「商う家族」

酒屋が立ち飲みで酒を飲ませるようになり、いつしか酒場になった。大家酒場のメッカ千住の、元祖大家酒場は今も従業員全員が家族のよう。3時半に開店。1000円札12枚持って一人で入ってくる客は、泥酔するガリバーマンとは無縁の、飲み方を知る大家酒場の常連。■DATA■永見富一(64才、永見昭子(60才) ■思い浮かんだこと・店員にひとり欠勤が出たことへひとりの欠勤では込みから見えな。 ■千住在住歴 父(64年、昭子(65年



「商う家族」



「うちは親子三代千寿第四小（現常東小）。三代とも同級生」の家もあるよ。9人兄弟の長男で家業を継いだ一馬さんを、息子成弥さんは「誰とでも仲良くなる。仕事まじめ」と尊敬。一馬さんは息子の成弥さんを「仕事に対して研究熱心」と評価。女性の縮毛矯正を研究中。多趣味で社交的な親子は「千住の人は人柄がよい」と千住が大好きだ。■DATA■野平一馬（76才、野平成弥（42才、千住東2丁目）「ヘアカロソニック」を経営。■思い浮かんだこと：北海道は大雪。東京は天気がよくていいなあ！（一馬さん）、ロト（成弥さん）■千住在住歴：一馬さん73年、成弥さん42年



義二さんが自然に千代子さんの肩に手を回す姿、二人三脚がナチュラルなふたり。「うちの奥さんは版しいところで修業してきて腕がいいんだ」とザラリとした家族目遣いなんともさわやか。この地で二代目の義二さんがはさみを持ち、千代子さんが顔そり、マッソージを仕上げる。千代子さんの腕のせいか床屋だが女性客も少なくない。結婚して42年、ネギがなくなっても隠れて借りられる。そんな千住に住めてよかったら」と千代子さん。■DATA■星野三（76才、星野千代子（69才、千住大川町）「バーバーほし」を経営。■思い浮かんだこと：今晚のおかず、何だろかな？（義二さん）、疲れた（千代子さん、現在私生活に少々心労あり）■千住在住歴：義二さん75年、千代子さん42年

「商う妻たち」

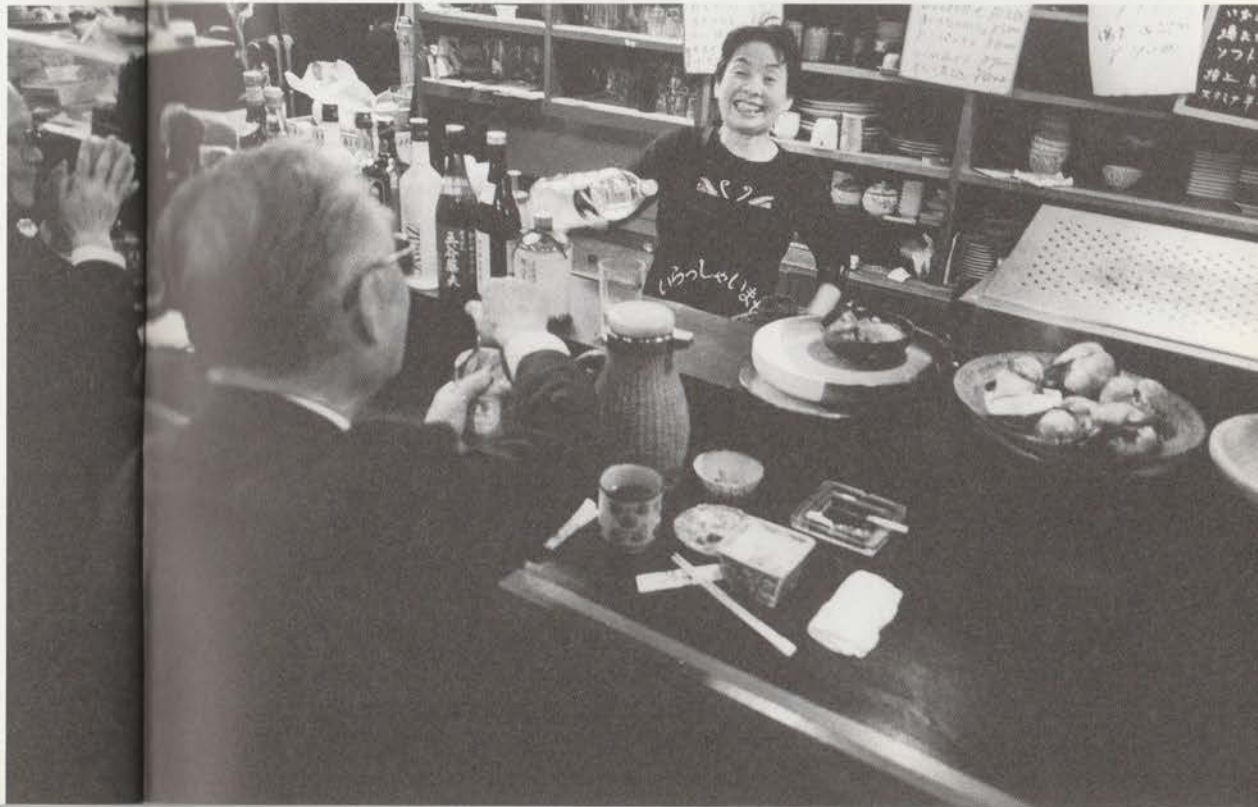


やたら突っ込みを入れる旦那を横目に撮影。それでもフコさんの笑顔は消切れない。「多慶夫婦喧嘩するときは、カメラ持てやるとは旦那。柳原音楽祭」の仕掛け人でもあり、ちょっとした町の有名人を夫に持った彼女の毎日忙しい。■DATA ■小倉修子(55才) 柳原のうなぎ料理店「あひす」女将。■思い浮かんだこと「夫が良くなったらなあ」とこの日、病院に入院していた10歳のお祖母さんを迎えに行つた。 ■千住在住歴20年



「肉の平川」だからといってお肉は買えませんが、今は総菜屋で、総菜屋閉店の後は洋酒を中心とした店に変わります。かほるさんも「女将さん」から「ママさん」に変わります。だけど「女将さん」もママさん「もびんと来ない。生年月日を記入していただいたとき、「ももあちゃん」と笑う笑顔が少女のようだった。■DATA ■平川かほる(57才) 千住龍田町、大門商店街「肉の平川」女将。■思い浮かんだこと「寒いな...」(お年寄りの多い町で、寒暖は直接商いにもつながる) ■千住在住歴38年

17才のとき、福島から嫁に来た。千住柳町の遊郭「山木」は、おでんと牛めしの定食屋「二やなぎ」を経て、伊豫焼き、後に居酒屋に。いつも酔っ払っている旦那を自由に遊ばせながら、我関せずと店を切り盛りしているように見えたが、突然未亡人となった一昨年、彼女はバタリと店を開めた。長い時を経て、昨年の「二やなぎ」再開は、彼女の新しい人生の出発となった。■DATA ■今村節子(63才) 千住柳町で居酒屋「二やなぎ」経営。■思い浮かんだこと「お客さん。お客さんがいっぱい来くれ」と私を機嫌なんですよ(今日のランチは満員だった) ■千住在住歴47年





「自分の部屋だといいうちさんの周りに人を、カウスターの花が目に飛び込んで来る。こゝを訪れる人には『あなたのイムがあるやうな居心地よさ』と程ない緊張感を感じてもらいたいと話す。酒を飲み、話しい、沈黙してこゝ通らず時間の中に彼は何を感じているのだろうか？ 彼は今の仕事を「人に包まれるための道具……かな？」とボツリ『う。店には言や詞をまとめた、ファイルがある。そこには優しく、冷く、強く、弱く、喜び、涙する言葉があった。生きているんだな』と強く感じる。■DATA■シマカワコウ子(2)千住十自のBAR「COSMIC SOUL」マスター。■思い浮かんだこと、睡眠(変な夢で目が覚めたため) ■千住在住歴14年

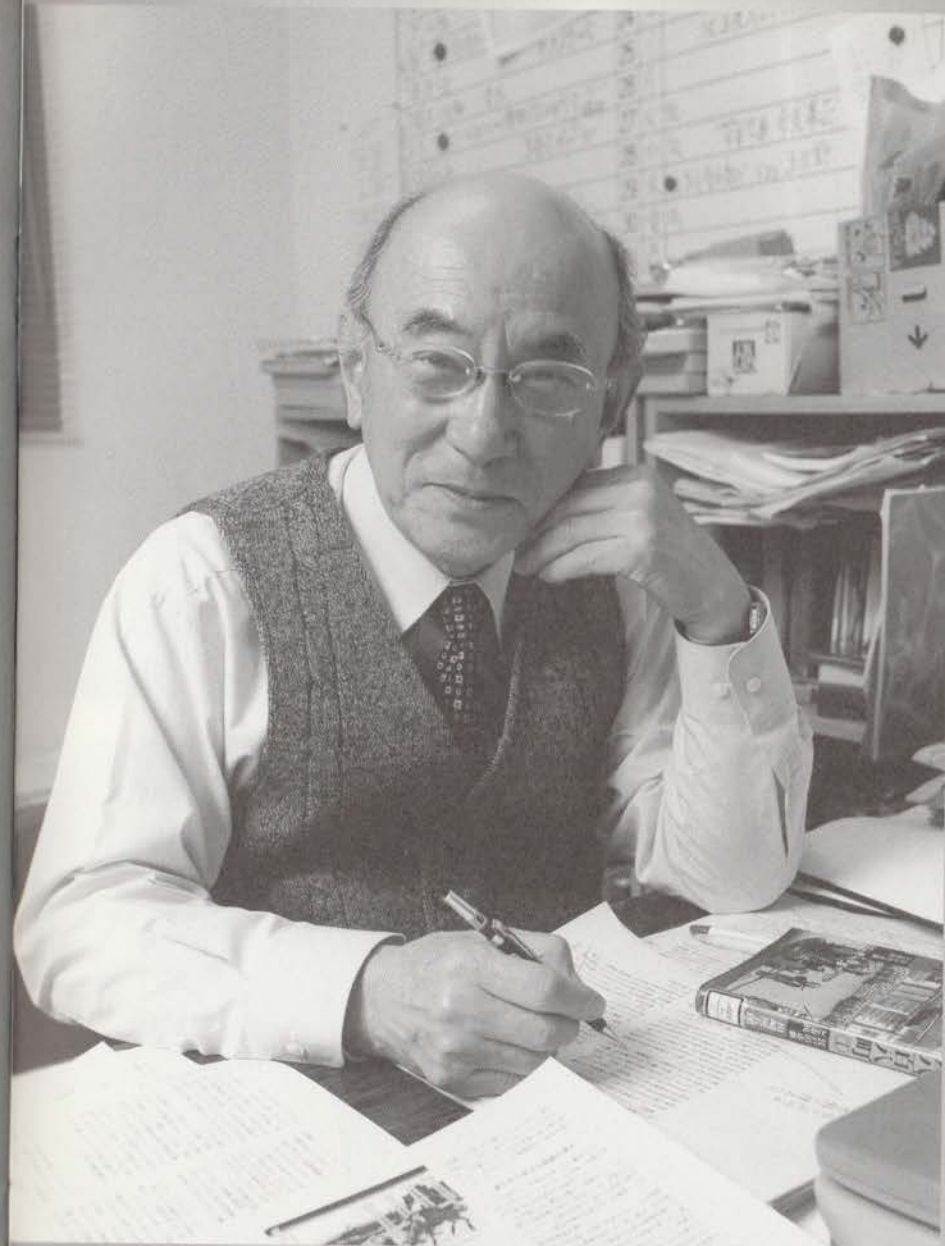
「取ったとは簡単にできちゃった」好むなとを教えるときはワウワウと叫ぶか
店を始めると言はなかった彼は言。しかし二ヶ月がかりでワウワウと手作りし
た店内でとまとい、戻した場面は少なくない。ひとつのまなやのまなやのまなやを
感じた。開店して3年の間に、酒とお客さんから多くを学んだ。入るのまなや
の中にこそなんぼのまなやがあることに、そして、彼はまなやのまなやのまなやを
感じながらまなやにいてい。インドア派のまなやが休日には、イン・アウトのまなやを
はまのまなやの中は結構なまなやと語ってくれた。■DATA■前編(2003年) 毎日
通り飲食店の「Bar Rouge」マスター ■思い浮かんだ「まなや」(友人
にメールの返信をしたので) ■千住は住歴8年

A black and white photograph of a chef in a white uniform and hat, focused on his work in a kitchen. The chef is wearing a white chef's hat with Japanese characters on it, a white short-sleeved shirt, and a patterned tie. He is leaning forward, looking down at his work. The background shows a kitchen setting with shelves and various items.



50年以上足立区を撮影し続けた。他に続けているのは、夫婦で行く全国三十三観音霊場巡り。もう十数回以上回っている。「昔」撮った写真、様々な記録を見せて頂きながら何ったのは、昨今の世知辛い時世を憂う話からこだわりの写真談義まで。その中で「続ける」という言葉を幾度となく聞いたのが、印象に残っている。「物事を長続きさせる事には、変化を知ることができる良さがある」と石坂氏。■DATA■石坂満（81才）千住2丁目の見番の息子として生まれる。現在足立区本木在。■思い浮かんだこと：今日なんか天気がいいから、富士山もきれいだろうな。■千住在住歴20年（誕生～20才）その後も常に足を運ぶ。※27ページに関連記事

（写真・文／熊谷永浩 撮影／2004.1.16）



日本厚生新聞の記者・区役所広報・教育関係部門を経て現在足立史談会会長。詩人としての顔も持つ。役所時代は地域をくまなく回るポストは何かと考え、税金の徴収の仕事に就いたりもした。「古くからあるもの、その昔に起こったことが今、どんなことに役にたっているのかをみつける、なくなったものにはなくなっただけの理由をさぐる、この近代都市に昔の楽しさをとり入れることが出来るかを考える、そういうことがおもしろい」。時間を忘れてしまう程楽しいお話の中に、事物を通じて哲学する事、学ぶ事の大切さを教わった。■DATA■安藤義雄（76才）千住仲町に生まれる。現在足立区中川在。■思い浮かんだこと：仕事の事。朝起きて、今日は何の仕事だとか、仕事の事が常に頭の中にあるねえ、約束も多いから忘れないようにしてます。■千住在住歴12年（誕生～12才）※18ページに関連記事

千住っ子

千住育ち



■DATA■宮本健一（59才）ひろ子（54才）千住3丁目に生まれ育ったひろ子さんと結婚を機に千住へ来た健一さん夫妻。■思い浮かんだこと：仕事のこと（今まで仕事していた）（健一さん）。町に出たらどこもクリスマスード（ひろ子さん）。■千住在住歴26年（健一さん）54年（ひろ子さん）

（写真・文／武居厚志 撮影／2003.12.23）



「亭主関白です。けんかはしません。私が一方的に怒るだけです。それに対して文句を一切言わないのに感謝しています。夫婦間はお互いに尊重しあっていれば、絶対こわれたりしません」とはご主人の弁。ご主人は、国技館など曲線を使った日本の建築を数々手がける設計士。奥様は北千住丸井に日本茶でくつろぐ店「茶翁」をオープン。千住2人暮らしの生み出す世界は広がる…



「着物が一番、ラク!」と言う萩谷さん。中国満鉄時代、第二次大戦派兵、シベリア抑留と厳しい時代のさなかにも、美しく豊かなものが好きという心を持ち続けてきた。「どんな時代になっても人の心は大切だと思うの。豊かでありたいわよね」と語ってくれた。学生服、軍服、背広……制服を着つつけることに窮屈さを感じ、八年前から日本舞踊を始めたのをきっかけに女ものの着物を毎日身に付ける。「踊りが好き、着物が好き」。日々の暮らしに、生き(粋)様を感じる。■DATA■萩谷明(78才) 千住4丁目で一人暮らし。■思い浮かんだこと: 踊り。(心が豊かになるね) ■千住在住歴16年

(写真・文/柏原文恵 撮影/2004.1.7~14)

家族 千住つ子



「男の子三人続いたから次は女の子がいいなあ」。千住に暮らす4人の子持ち母は、働きながら、忙しい夫、実母とともに、子育てライフ満喫中。日ノ出町に生まれ育った美子さんを中心に、沖元ファミリーは土手遊びが大好き。■DATA■沖元美子(26才)くらら(6才)楓(4才)翔(2才)涼(1才)高橋いつ子(59才)■思い浮かんだこと：子どもたち、大きくなったんだなあ！(昨日生まれたての赤ちゃんを見た)(美子さん)。■千住在住歴26年(美子さん)

(写真・文/武居厚志 撮影/2003.12.23~2004.2.7)

家族



「お母さんに聞いてくる」は、末っ子の佳織ちゃんのお癖。うちへあがれと誘ってもお菓子すすめても、今どきの子どもに似合わぬ遠慮をする。4世代が出入りする大家族の豆腐屋は、子どもに厳しくまたあたたかい。去年亡くなったじいちゃんは千住3丁目の名人人間で、自分ちの子だろうが近所の子だろうがわけへだてなく怒鳴った。最近佳織ちゃんの大きい兄ちゃん（22才）が忙しい店の柱となって働き始めた。大きい姉ちゃん（21才）が2人の赤ちゃんを産んで、佳織ちゃんには早くも甥っ子姪っ子がいる。■DATA■浅井フサ子（75才）浅井純子（40才）浩貴（12才）勇貴（10才）神司（9才）佳織（6才）代々千住で商う浅井豆腐店の一風景。男性陣は、シャイなのか愛想がないのか写真には写ってくれず。■思い浮かんだこと：ねむい〜（昼休みに話を聞いた）（純子さん）■千住在住歴フサ子さん55年、純子さん15年

（写真・文／鏡又将文 撮影／2003.12.24）



子どもは、病気でなくともひよっとしたこと体調を崩しぐずる。四、五歳に多い。私もよくぐずった。すると母親は仲町の御嶽山の行者へ連れていった。祭壇の前に座らせられ山伏が大声で祈祷する。そしてやにわに刀を抜いて人の頭の上をエイツ、ヤツと八方に切る。その恐いこと。「どうだ、治ったか!」と言われれば、「うん」と頷かざるを得ない。子どもの我侭や甘えを封じこめるのは御嶽山に限る。御嶽山に行くよと言われれば、慌ててぐずるのを止めた。一丁目の慈眼寺の「虫封じ」の方は痢の強い子がやってもらっていたが、これは呪いのようだった。

今では救急医療体制が整っているのに不安が大きい。昔は家伝の秘法みたいに子育て術を親から教わり一家を支えていたのである。

ひまし油、下痢止め、イチジク浣腸、頭痛薬、咳止め、解熱剤、風邪薬、オキシフル、傷薬、メンソレータム、絆創膏、脱脂綿、包帯、オブラート、肩凝りの相撲膏などが箱詰めされ不自由しない。一番使うのが風邪薬、名前がとほけている。「アスナオール」というのがあったが、新薬と称して「ジキナール」に変わり、「ジキニン」となり、極め付けが「ケロリン」である。置き薬の行商人は時々訪れ、使った薬の料金を受取ると新品を補充し、古くなった薬は交換していく。また、家庭では体温計はもとより、水枕、氷嚢掛け器、蒸気で喉に薬をかける吸入器や浣腸器などの医療機器までも揃え、病人が出ると母親は火鉢に洗面器をかけて部屋に蒸気を立て、見よう見まねで看護婦みたいにかいがいしく看病した。



千住の思い出。

……子育て……



安藤 義雄（文筆家）

子育てでノイローゼになる若いお母さんが多い。育児本の情報に頼るからいけない。自分の子が標準に当てはまらないと動揺して迷う。しかし、たとえ下等動物でも子は育てている。腐心するほどのこともないのだ。

嫁が私を掴まえて「よく育ちましたね」と感心する。母は私を生むとすぐに死んだ。幸い長姉夫婦が親となり缶詰の練りミルクで育ててくれた。江戸時代は白雪（はくせつこう）という米粉で作った落雁のような菓子を湯に溶き飲ませたというので、練りミルクの方が上等だ。いまでは粉ミルクに加味されるビタミンなどの栄養素が重視されるから、練りミルクだと聞くと呆れるのだが、写真を見る限り練りミルクでもよく太り元氣そうである。何だかんだと七十六歳、まだ死にそうにない。ただし、幼児期はだれでも七五三が済むまでとにかく病気になる。私も同じ。

昭和のはじめ、千住の町医者はみな路地裏で質屋みたいなひっそりと開業していた。昔の人たちは病気を恐れていたから、世間に隠れて通院するか、重くなって往診を頼んだ。

そのためか、どの家庭にも富士の薬売りの置き薬が常備されていて、お医者さんより戸棚のミニチュア薬局を利用した。歯痛止め、目薬、眼帯、胃腸薬、

千住の町を270度見渡す暮らし

千住に移り住んできた新住人たちの住まい方、視点を通して、千住の魅力を探るページです。

●今回は御夫婦二人暮らしの千住ライフを紹介します。だんなさまはサラリーマンでSE職、おくさまは歯科衛生士という共働きのお二人です。ふたりともとても優しい雰囲気をお持ちで、なんだかほっとしてしまう素敵な御夫婦です。

●だんなさまは神奈川県出身で、結婚される平成8年までは横浜で一人暮らしをしていました。おくさまは千住出身。子供の頃は御両親と千住4丁目で暮しており、小学校はお父様の代から千住本町小学校です。お父様の頃は、校舎が木造、おくさまの時は鉄骨造、そして今は鉄筋コンクリート造。建て替えられていく過程を親子2代で見てきたことになります。その頃は、千住のまちのあちこちに小さな映画館がたくさんあって、ぶらりと映画を見に行けたそうです。今でも千住4丁目の近辺には、おくさまの知り合いがたくさん住んでいらして、町を歩くとよく幼馴染みに出会うそう。

すてきです。



●おくさまは20代になると、足立区北部の花畑の公園でひとり暮らしを始めました。1DKで家賃が27,000円。一人でくらすには充分なお部屋でしたが、アウトドアを通じて知り合い結婚しただんなさまが越してくると、ふたり住まいはさすがに狭く、押し入れまで部屋として使う状況。そんなわけで結婚してから1年後、ふたりは千住寿町にある日光街道沿いの3LDKのマンションに引っ越ししました。が、目の前の通りを走る車の音があまりにもうるさくて無視できず、3年半後に2度目の引っ越しを決断。現在の住居に越してきました。



世界の地球儀

●現在のふたりのお住まいは北千住駅の東口から歩いて10分、千住東に建つ9階建マンションの8階にあります。千住の中ではけっこう高さのあるところに住んでいるのではないのでしょうか？ 間取りは2LDK+ルーフバルコニー。このルーフバルコニーがとても広くて素敵です。千住でも最近増えてきた高層のマンションですが、法律上高い建物が建てられない地域と建てられる地域があって、千住にも高層マンションが建てられない地域がけっこうあります。ふたりの住むマンションは、この、法律上の地域が変わる境目となる道路に面して建っているため、目の前には低層の住宅街が広がり、荒川の土手まで見渡せる好立地です。

●千住に住むと言えば、戸建て住宅が密集した路地に住む下町暮らしも楽しいですが、こんな風に千住の景色を遠くまで眺める生活もまた、千住ならではの町の楽しみ方といえそうです。夏になると、荒川や隅田川の花火、そして、遠くのものまで含めて、ほぼ毎日のように花火が見えます。夏は友だちを呼んでルーフバルコニーで花火を見ながらバーベキューをしたりして楽しい時間を過ごしています。実はこんな広いルーフバルコニーのある住居はこのマンションの中でも一戸だけ。この広さにしては高価だったため、最後まで売れ残っていたところを契約したそうですが、偶然ながらとてもよいお部屋と出会えたのではないのでしょうか。ルーフバルコニーから、270度方向に景色が広がり、最高の開放感です。高層住宅が建っている方向にはだんなさまが手製の目隠しを作ったり、ベランダではハーブやラディッシュを育てたりして、手づくりで物を作るのが好きなおふたり。現在コンクリートがむき出しのルーフバルコニーにもそのうちタイルを敷いたりして、もっと魅力的な空間を作りたいと考えています。上から眺めると、千住にはまだまだ緑がたくさんあることに気付かれます。鳥が好きなだんなさまは、いろんな鳥が遊びに来るのも楽しみにしています。オナガや、メジロ、ひよどりなんかも遊びに来るそうですよ。



ハーブを育てています。



●そして、千住暮らしの好きなところは土手があるところ。土手に七輪を持ってサンマを焼きに行ったりするのが楽しみのひとつです。出会いのきっかけがそうだったくらいですから、基本的にアウトドア派のお二人。マンションの屋上から見る空もすごく広いし、町中のマンションに住みながら自然がこんなに近くに感じられるのも千住の大きな魅力なんですね。



●お住まいの中でちょっとこだわっているのが、リビングとつながっている和室の「機がしいものコーナー」です。ここにはふたり（主にだんなさま）が集めた、ちょっと古くていい味出しているものたちがならんでいます。以前に住んでいたマンションに合わせて作ってもらった階段筆箱、おじい様から譲っていただいた古い真空管のラジオ（現役！）や鉄の扇風機、怪獣ブースカの目覚まし時計などなど……。そして天井の照明からは葉屋さんからもらった紙風船がぶら下がっていてすごくキュート！昭和っぽいやさしさがすごく素敵です。お二人が好きなものたちを見て、なんだか千住の町の魅力に通じるものを感じました。職場にすごく近いわけではないのに、気がついたら千住に住み続けているお二人。歴史の深さも感じながら、肩ひじ貼らずに暮らせるまち。新しいものと古いものが混在しているレトロな町の空気が、おふたりを離さない千住の魅力のような気がしました。



トリヤマアキコ

●今の住居に満足していますし、引っ越しはまだ全然考えていませんが、実は小さな野望があります。いつになるかはわかりませんが、次に暮らすとしたら、千住に庭付きの戸建てがいいなあ、その庭で野菜を育てたりして庭仕事を楽しむ暮らしなんかいいなあ。なかなかお手ごろな不動産はないものですが、そうそう簡単には実現しそうにもないですが、なにか、ふたりにぴったりのいい土地があったらこっそり教えて下さいね。



プロフィール／とりやまあきこ 1978年つくば生まれ。東京理科大学、同大学院で建築学を学んで、現在は建設会社の設計部で修行中。千住町・元気探検隊メンバーとして2001年のイベントから活動に参加。

千住 明治の女伝

12.
今もおけいちゃんと呼ばれる

杉田うめこさん 93才

杉田うめこが本名だが、「きみこ」「大きい姉ちゃん」「おけいちゃん」とも呼ばれてきたこの人の人生は、周囲の人に恵まれた人生であったように思う。明治43年3月生まれ。今年で93才。耳が遠くなり、少々記憶が混濁することもある中で、話を伺った時は、一緒に暮らしている甥っこの奥さん杉田菊江さん（72才）に同席いただいた。

生まれてすぐ母親が出奔、幼くして里子に出されたが、農家だった里親の留守中に、囲炉裏のこたつの火がきもの裾に燃え移り大やけどを負い、足を切断。一時は生死の境をさまよったという。それ以降、足が不自由になる。7歳の時に呼び戻され、日暮里で父と兄、弟との四人暮らしをはじめた。一番上の兄は千住大橋の方でトタン業の親方に奉公していた。

うめこさんには愛称がいくつかある。里子に出された時に同年代の女の子がいたのか「大きい姉ちゃん」と呼ばれ、それが縮まって「おけいちゃん」。父親や兄からは「きみこ」と呼ばれていたが、戸籍を調べると本名は「うめこ」となっていた。現在戸籍名はうめこだが、「一緒に暮らしている家族は親しみをこめて「おけいちゃん」と呼ぶ。

日暮里から千住の柳原に越して来て20日ぐらい

うめこさんと菊江さん。うめこさんはしきりに「私は写真写りが悪いのよ」とぼやくがしきりに菊江さんに「かまえずきてるからよ」とツッコミを入られていた



ワイン&チーズ教室

試飲会

- 入門コース
ワイン選びやホームパーティのために
- 上級コース（現在合格率100%）
ソムリエやワインアドバイザーの受験対策に
- 試飲会
希少ワインや高級ワインを試飲したい方に

	ワイン入門	チーズ入門
コース	第1〜3火曜日	第1〜3水曜日
時間	13:00〜16:30	13:00〜16:00
料金	¥5000×9回 ¥45000	¥5000×3回 ¥15000
内容	講義&試飲8種	講義&試飲+ワイン

	ワイン上級	試飲会
コース	第1〜3土曜日 第1〜3日曜日	年 数回
時間	13:00〜17:00	19:30〜21:30
料金	¥6000×3回×7月 ¥126000	¥8000 〜¥15000
内容	講義&試飲10種	品種or産地

空輸
ナチュラルチーズ・テイクアウト販売
世界各地の約30種を100g前後より



ヴィノフルート 池田 茂

J.S.A認定シニアソムリエ
C.W.A認定マスターオブワイン&チーズ
D.J.W認定ドイツワインケナー

■問い合わせ■
東京都足立区千住2-32 マスダビル2F
Tel : 03-3879-1810 Fax : 03-5813-3636
E-mail: kyoushitsu@vinoflute.com
shiinkai@vinoflute.com
HP: http://www.vinoflute.com

取材・文・写真／川上佳子
取材日／2003年12月20日 23



第2次戦争中。千住、柳原の当時の家の前で、隣組の皆さんと。真ん中で子供（甥っ子さん）を抱えているのがうめこさん

たったところ、関東大震災に遭った。「ちょうどお昼どきだったんだけど、2階にいてね、階段がぐわーって揺れて。ごはんそのままだに、ひざで弟と逃げたの」。当時柳原には農薬用のどぶ川が流れていたが川の水が反乱して、大水になっていた。近所にあった木の下に逃げ、地震で傾いてしまった家に戻ったのは3、4日してからのことだったという。「お宮のところが大丈夫って聞いて行ったのに、大水がすくって厚い板がどぼどぼ流れて来ていた。柳原は砂地だったから色んなところで大穴があいていて、落ちたら大変なことになりそうだった。当時の柳原はまだ家がボツボツとしかなく、周りは畑ばかりで電車の駅が見えたそう。「食べる

ものがなくてね、あにさんがどこかで手に入れてくれた干しいかの味がおいしくて、忘れられない」。その後、父親が亡くなり兄弟三人の生活に。「あにさんが働いて、お金を預かっていてたから、家事は全部やったわ」。一番辛かったのは洗濯という。「ひざについて洗濯板持つてやるから、身体中がびちゃよりになつて。よくやるねってみんなから言われたわ」。買ひ物は足が悪くて行けないから近所の漬物屋さんやお駄賃をあげて買ってきてもらい、八百屋さんや魚屋さんは御用聞きに頼んで、毎日の食事の支度をした。お風呂は小さいころは父親におぶさるって銭湯で男湯に入っていたが、大きくなつてくるとそうもいかないので自宅に風呂場を作った。沸かすのがまた大変だったが、一番風呂が好きな兄のため、仕事から帰ってくる時間に合わせて沸かしたという。「でもね、よくあにさんにおぶさって夜お散歩したわ。花電車がきたとかで夜店にも行った。優しかったの、あにさん」。

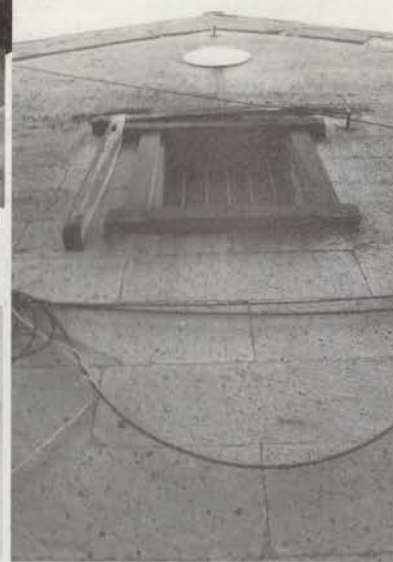
戦争中は兄嫁の実家の宇都宮に疎開した。兄は徴兵で戦争に行つたが、うめこさんという妹のいる自分分は、何かあつて死んだら大変だと醤油を飲んで身体を調子を悪くして帰ってきたのだそう。

戦後、手に職をということで和裁を習いはじめた。和裁教室までは兄嫁がリヤカーを引いて連れて行ってくれたという。雨の日も風の日もリヤカー引いて。そりゃあ出来たお嫁さんだった」とは菊江さん。その菊江さんは、うめこさんが昭和30年ごろ、自宅で和裁教室をやるようになって通つて来た生徒さんだ。妹や友達たちと通つていたが、そこでうめこさんの兄夫婦の長男と知り合い結婚。「嫁いできたのは27才の時。とにかく大家族で、大変だった。うめこさんの兄夫婦と子供6人、うめこさんの弟さんは亡くなつていたが奥さんも同居していた。女の人がひとつの家庭に4人もいて、けんかをしないはずがない。

なまに「菊江さんにズバツと言われたこと」あいつて嫌だと思つてもあるけど」と愚痴を言えはすかさず菊江さんが「自分が気に入らない時はすごく反抗するじゃない。思つたまんまなんてことではないわね」とツッコむ。本物の親子以上とも思える、お互いへの深い理解と信頼の上に成り立つ関係がうかがえる。現在はこの甥っこ夫婦とその子ども、孫たちに囲まれ「おけいちゃん、おけいちゃん」と慕われているうめこさん。「みんなにあんまり憎まれないで、あたしは案外幸せだわね。小さい時の苦労や複雑な家庭環境など、決して順風満帆にきた人生ではないが、そのマイナス要素を上回る周りのあたたかいサポートで、93才のいまも元気で、お酒と焼肉と柿の種が好きと言ううめこさん。彼女の言う「幸せ」は、やさしい兄夫妻や菊江さんという実の娘のようなバブルな助っ人を得たことも大きかったろう。しかし何より、芯が強く、底抜けに明るい彼女自身の性格が、周りの人々を魅了してきたからに違いないと感じた。



駅前にあった蔵



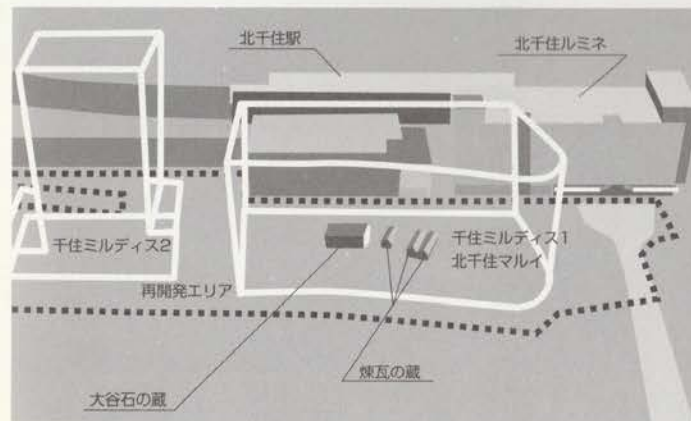
大谷石の蔵

調査図面をもとに1/200の模型を作成



駅前の蔵、最後の目

千住宿歴史プラテラスでの展示で再活用のアイデアを募集



煉瓦の蔵。外壁は瓦ごと、隣接した鉄骨建物の壁面装飾となっていた

■形を変えて生まれ変わった蔵

北千住駅西口に再開発ビルができあがりました。これから千住も大きく変化し、また発展していくことでしょう。ところで以前その場所がどんな様子だったか覚えていますか？そこは細い路地が走り木造の家屋が建ち並び千住では見慣れた様子の場所でした。その中にこの物語のはじまりである「大谷石の蔵（倉庫）」と「煉瓦の蔵（倉庫）」がありました。

「大谷石の蔵」は外壁が大谷石ですが骨組は木造で思ったよりも軽い造り、一方「煉瓦の蔵」は名前のとおり重厚な煉瓦造りで鉄骨の建物を挟んで建てられていました。どちらも各所に蔵に使われる「金具」があり、そのため私たちもあえて「蔵」と呼んでいました。解体の時は屋根がトタンで覆われていたが以前は瓦で葺かれていたそうで、「煉瓦の蔵」にはその名残がありました。2つの蔵は使われるうちに様々な改修を受けながら長い間生き続けたのです。風化した外壁を見ると時間の経過が伝わりました。（町雑誌千住VOLUME6参照）その2つの蔵の部材が生まれ変わり、いま千住で使われています。

■古材をゆずり受ける

平成13年の初夏、2つの蔵が再開発事業に伴い解体されることになりました。私たち「千住・町・元氣・探検隊」は、2つの蔵を「千住の産業の発展と共に時を重ねてきた貴重な建物」とであると思い、何かのかたちで残すことができないかと知恵を絞りました。

その結果、使用されていた部材を再利用することを思いつきました。そしてその思いに賛同してくださった方々のご協力、部材をゆずってもらうことができました。「大谷石の蔵」からは梁の角材（15本）と大谷石の板、金具類を。また「煉瓦の蔵」からは梁の丸太材（30本）と煉瓦（150個）です。私たちはその部材に敬意を表し「古材」と呼んでいます。

この活動始めるにあたり、新たに「古材チーム」をつくりました。その最初の活動は丸太材の運搬で、リヤカーで行いました。すごく重く、汗だくになって運びました。その時の苦労が今の活動を支える原動力にもなっています。その後は「古材」の存在を多くの方々に知ってもらおうと千住歴史プラテラスなどでの展示や再利用アイデアの募集をしたり、また私たちが理解を深めるための試し切りや実測調査などを行いました。「大谷石の蔵」は、建物の実測調査の結果をもとに復元模型もつくりました。

■古材でつくる

私たちは「古材」でどんなものができるかの話し合いを重ね、実験的に古材（丸太材の輪切り）を座面にしたスツール（椅子）をつくりました。鉄製の脚を付けただけの飾り気のないシンプルなものですが、再利用を考える時は、今でも参考にしていきます。これが原点です。

また、ワークショップ（参加者が自主的な活動方式で行う講習会）も企画し、「古材」でつくった「椅子」や「看板」などを千住のまちの中に置きました。ワークショップにした理由は、「完成したものでだけでは伝えられない何か」を感じてもらいたかったからです。話や作業の過程を見ていただくことで、道行く方々に「蔵」や千住のことを伝えることができたと思います。「古材」の椅子や看板は今でも千住の各所で見ることができず、お散歩の途中にご覧ください。

その後、千代の湯（千住3丁目）のご主人とお話をする機会があり、そのなかで「古材」でベンチをつくる話を持ち上がりました。絶好の機会、私たちはご主人と話し合いを重ねながら、愛情を込めてコツコツとつくりました。ここでは「煉瓦の蔵」の丸太材の形を大切に、シンプルで丈夫なベンチが完成しました。千代の湯のご主人やお客さんも喜んで使ってください。私たちが少しづつ千住のまちの中に点在し、多くの方に見ていただける機会が増えてきました。そして私たちは「古材」を通していろいろな人と交流することができました。この経歴を活かして今年も「古材」の再利用を進めていこうと考えています。再利用の資金、作業人員、保管場所の問題等いろいろありますが、これからも様々な提案をしていきます。



組み換え自在の「古材キット」を使って開催したワークショップ



メンバーの庭先で作業中

■プロフィール／ふじもとしんじろう

1977年大阪府生まれ、現在千住在住。日本工業大学で建築を学びながら、都内で江戸時代の遺跡発掘にも携わる。千住・町・元氣・探検隊「古材チーム」リーダー

この連載は、千住の町を西へ東へ歩くだけでなく、少～し過去へも歩いていただくための道しるべです。

■あの頃の遊び（前編）■

「もういいかい」「まあだだよ」「正ちゃん見つけた」。小学校が終わる午後3時頃から夕方日が落ちて暗くなる頃まで、何処からともなく隠れんぼ、鬼ごっこの子どもたちのしゃぐ声が聞こえてくる。千住は旧日光街道を挟んで側道まで横町や路地が数十本もあり、前述のような男女共同の遊びがあった。路地は車も通らず、また人も地元の人以外は通らない。行き止り、袋小路、抜け道と、地元の人でなければわからない道がた

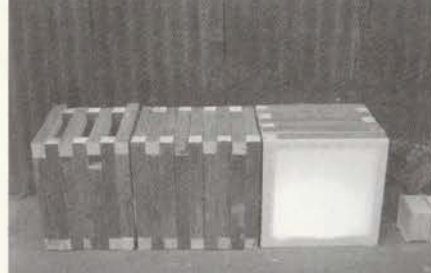
くさんあった。子どもたちには面白く安全だった。大正の後期から昭和初期までは、江戸時代後期の文久、元治、慶応（1860年代生れ）のおじいちゃん、おばあちゃんが達者で健在だった。伝統的な子どもの遊びを伝承して教えてくれた。昭和初期の家庭は、子どもが5、6人で普通、8人9人の兄弟姉妹も多かった。貧乏人の子たくさん、律義者の子たくさんといわれた時代で、貧乏があたりまえであり苦にしないが、子育てには懸命だった。また子どもも丈夫で元気だった。「ただいま」と声がしたかと思うとカバンを放り出してすぐ遊びに飛び出す。子どもが学校から帰るのを待ち受ける家庭も多かった。子守りをさせるためだ。幼い子、赤ん坊をオンプさせる（背負わせる）のだ。小学校4、5年位になると男女を問わず、オンプして平気で元気に飛び回る姿が、今でも目に浮かぶ。赤ん坊の頭が前後左右に振られても平気で縄跳び遊びをする。それで元気に育ったのだから不思議なくらいだ。

子どもたちの遊びも時代時代の世相や社会事情により変わるものだ。昭和4年の世界恐慌による世界的不況、不景気、昭和6年の満州事変、同7年の上海事変、三陸の津波、同8年、9年の東北地方の連続凶作等々、暗い時代だったので当時の親は大変だったと思うが、子どもたちは元気だった。しかし、軍国主義が台頭してきてからは子どもの遊びも変わり、兵隊ごっこ（戦争ごっこ）やチャンバラ（ケンゲキ）が流行りはじめた。男女共同での遊びもその頃に姿を消した。（次号に続く）

（写真・文：石坂満／郷土写真家）



昭和40年代の子どもたち。カチカチと「しょうし木（拍子木）」を叩いて歩くおじさんの黄金バットの名調子が懐かしい。



大谷石蔵の梁であった杉材で作成されたベンチ。組み換え自在の「古材キット」でつくり路地や横丁に置かれた。いずれまた形を変えて使われ続けることになる。



2才のやまとちゃんにあわせたミニ腰掛けと一緒に成長する

煉瓦蔵の梁であった松材で作成された千代の湯の待ち合いベンチに座る御主人（右）と常連のお客さん。座り心地は上々とのこと



実験的に樹脂コーティングしたもの

まちの記憶を伝えたい

私たちは、古材の再利用にこれからも様々な提案をしていくと同時に、皆さまのアイデアやご協力を求めています。興味を持たれた方は是非参加してみてください。

▼「煉瓦の蔵」の持ち主であった方が、解体される際にとっておいた煉瓦の一部を再利用され、新しいご自宅の花壇に使われています。このように古いものを現在の暮らしの中にうまく取り入れていく工夫を私たちも見習いたいと思います



まじ満

【うなぎ】

場所■東京都足立区千住仲町40-1
 (千住警察署近くミリオント通り沿い)
 北千住駅より徒歩8分
 営業■午前11:00〜午後10:00
 (第2・第4日曜と第1・第3日曜の翌日休)
 電話■03-3888-4411

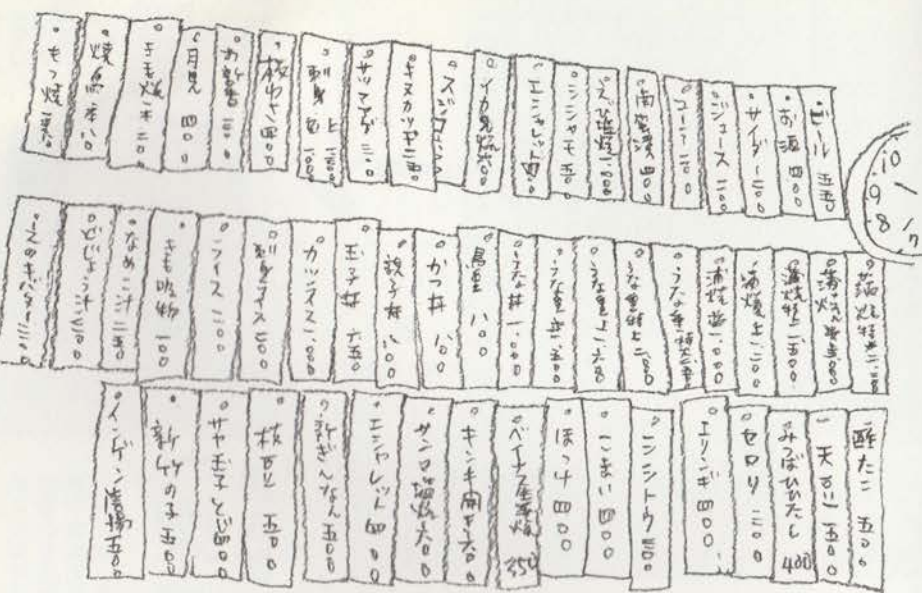


おやっさん(右端)は日本橋や浜町、築地、芳町、京橋、新橋などの日本料理屋やうなぎ屋で修行を積んで昭和31年にこの店を創業。当時はミリオント座がまだあった。「じいちゃん」の代が通つてるといふ人も、常連さんは裏から入って裏から出ていく。謙虚なのが、まっすぐ家に帰らない事、後ろめたさなのか。小上がりとかお座敷もある。



「まじ満」をひとに説明するとき「80代、70代、60代、50代、40代、と各年代が一同に並んでる店」なんて話す。年齢は違つても、揃いの白衣姿の顔は皆どことなく似ていて、ついクスッと笑みがこぼれてしまう。道路側、入口近くは焼き物担当のおやっさんの間島昭司さん、昭和6年生まれ。窓越しに通りから焼鳥やうなぎを注文すれば、お持ち帰りもできる。調理担当は弟の秀朝さん、昭和16年生まれ。出前担当が多いこの石橋さん、昭和23年生まれ。ちなみにわたしは石橋さんファン。フランスの巨匠建築家ル・コルビュジェに

似ている。接客担当でせがれ昭人さん、昭和32年生まれ。銀座のクラブのママも顔負けにお客のどんな話題にもついてきてくれるのがまじ満。わたしだったら絵のことや建築のことを話すけど、何でもずっと会話できるってすごいこと。隣の席では漢方薬の田辺さん、お花のお稽古帰りの植田さん、大工の棟梁上坪さん、専門的なことも何でもOK。先日は仕事を辞めたばかりの友達をなぐさめようと飲みに行ったら、お店の人も隣のお客さんもみんな参加してくれて、なぐさめか激励か、はたま自分の武勇伝まで、わたしの出る



幕もないまま、彼女は元気になった。七輪の練炭でお燗したお酒は気持ちまであったまる。春夏は「滝川とうふ」、秋冬は「にこり」を先ず頼む。そして炭火の焼き物。いちばんのお気に入り焼鳥。小ぶりな串がつまみにちょうどよい。わたしはいつも塩派だけど、ここのもつ焼はタレがうまい。うなぎ屋らしい味。足立市場から仕入れた魚は刺身もいいが、炭火でこんがり焼き上げたのが素朴でいい。ほろ苦い肝焼きも香ばしくてうまい。いつも申し訳ないと思うのだけど、そうこうしているうち、うなぎにたどり着く前にお腹がいっぱいになってしまふ。次は食べます。何十年の間、毎日ひとの手をもたせかけ続けた簡素なカウンターは、ほんの少しかたむきながら、木の温もりと黒いつやを見せる。時代を感じずにはいられない黒電話も時折りリリリンと鳴るから現役らしい。レジキャッシャーは魚が入っていた木箱を利用して、昭和48年におやっさんが手作りの小引き出し。金印と書かれた粉わさびの缶も味わい深い。昭和30年代から続

く空気が心地よい。夜はもちろん、昼酒や定食も心地よく過ごせるから、お休みの日に散歩がてら暖簾をくぐってみよう。(取材日2004年2月現在、建替え計画進行中につき、風情を味わいたい方は早めに足をお運びくださいませ。)



■プロフィール／1974年岩手県生まれ。街並み調査がきっかけで99年から千住に。約190年前に建てられた「蔵」をアトリエとし、フリーランスでイラスト、執筆、建築設計など多分野で活動中。職住近接の暮らしが気に入っている。
<http://www.nakadaeri.com>

マレーシア

PENANG/ペナン

文・写真：Kent Dahl



昨年の「SARS」の流行はマレーシア経済に大きなダメージを与えたが、それは同時に東南アジアで最も歴史の残る街のひとつペナンの生活にも影響を及ぼしたにちがいない。ペナンのなかでも、第二次世界大戦前に建てられた伝統的の家屋が約8000軒も建ち並ぶジョージタウンは、世界有数の歴史的建造物の宝庫であり、その多様さにおいても他にひけを取らない地域である。

ペナン島は北マレーシアに位置する島で、ジョージタウンの場所は1786年フランススライトにより選ばれ、つくり上げられた。スライトはイギリスの東インド会社で働き、この地域との貿易拡大を任務としていた。優秀な商人たちを呼び寄せるために、スライトはジョージタウンを「自由貿易港」とした。一般にイギリス人は植民地の原住民を差別していたが、ジョージタウンは貿易をするあらゆる人種と国籍に対して開かれていた。

千住が「宿場町」として、日本のあちこちから、商売を始めようとするさまざまな商人たちを呼び寄せたように、ジョージタウンも色々な文化を持った住民の故郷となった。今も通りの名が移民たちの歴史を思い起こさせる。街を歩けば、ビルマ、アルメニア、セイロン、アラビア等に由来する通り名を見かける。古くから住むマレー系住民とは別に、ジョージタウンには特に、インド系と中国系の住民

が多い。彼らは今日もこの街を支配しているが、彼らが皆、同一民族であるわけではない。ジョージタウンのインド人街を歩けば、頭に色鮮やかなターバンを巻いたシーク人も、腰に格子柄のサロンを巻いた南インドのタミル人も見かけるし、中国人の店に入ると、店主が南部の福建語を話したり、その他さまざまな中国方言で話すのが聞こえてくる。

また、多様な文化的背景はこの街の独特な料理にも表れている。ジョージタウンは歴史ゆたかな街だが、単にそれらの歴史的建造物が飾り物のように並ぶだけの「死んだ博物館」ではない。早朝6時には、線香の灯がともされる。それから彼らは通りに出て、アスファルトの中に立ち並ぶジョージタウンの屋台で焼きそばや「ラクサススープ」を食べる。インド人たちは、バナナの葉に盛ったカレーの朝食を指を上手に使って食べる。また、自転車に乗ったパン売りやベルを鳴らしながら通り過ぎ、牛乳屋がモベット（小型バイク）に大きな容器を載せ、温かい牛乳をカフェやレストランに運ぶ姿も見られる。

歴史的多様性は街の建築物にも反映されているが、それは、家賃の値上げを許さないという「法律」により守られてきた面が大きい。建物の所有者は収入が少なかつたため、建て替えは不利益でしかなかった。しかし2000年には、この法律に



よる家賃凍結が解除された。それ以来、家主たちは次第に古い家を壊し始め、代わりに得地の知れない数階建てのコンタリートビルを建てるようになった。千住の木造家屋が姿を消しつつあるのと同じ状況である。

地域組織であるペナン文化遺産トラスト(Penang Heritage Trust)は、ジョージタウンが国連の世界文化遺産に選ばれるよう尽力したが、今のところうまくいっていない。ともかく、できるだけ多くの家を保存するように努力が続いている。

ジョージタウンを訪れるほとんどの観光客は、25年前のシンガポール



■プロフィール/ケント・ダール。デンマーク。コペンハーゲン生まれ。1980年初来日時、千住を訪れ、1986年より千住在住。現在はジャーナリストとして、日本を拠点に、アジアの記事をデンマーク向けに発信している。

この春・新発売

「春うさぎ」

男の贈り物

「栗松露」

去年の秋・収穫の少なかった
熊本産の早生栗を
栗きんとんにして
栗シヨコラに仕上げました。



千住宿 喜田家

お問合せ、ご注文は——
[フリーダイヤル] 0120-388-190
(午前9時～午後6時)

- | | |
|---------------|---------------|
| 竜田町本店 | Tel.3882-4147 |
| 北千住ルミネ店 | Tel.3870-5247 |
| 竹の塚西口店 | Tel.3853-4147 |
| 五反野店 | Tel.3886-4266 |
| 梅島店 | Tel.3880-3266 |
| 花畑店 | Tel.3860-8841 |
| 町屋店 | Tel.3893-0831 |
| 丸井店 | Tel.4376-5124 |
| [洋菓子]ハルエグレース | |
| ハルエグレース花畑本店 | Tel.3860-8731 |
| ハルエグレース丸井店 | Tel.4376-5125 |
| ハルエグレース北千住駅前店 | Tel.3870-4146 |

200円
引き券



お願い その2 スタッフを募集します!

ボランティアスタッフですが、面白そうと思う方、ご連絡ください。特に身軽に動いてもらえる人好きなスタッフを募集しています。▼取材にまわれる方▼写真を撮る方▼MAC (クオーク) ユーザーで版下作業までしていただける方▼宛名書き配達などの出来る方▼配達できる方などなど...

●千住の面白いひとものこと募集します!

なんでも千住の情報を教えてください。お手紙・FAX・お電話などでよろしくをお願いします。

町雑誌千住はここで買えます!

●千住旭町/アサヒ書店 旭町歯科医院 喜田家ルミネ店
とんかつもりき 丸善・があるルミネ北千住店 よしだや
●千住東町/ヘアーサロンノヒラ●柳原/桑びす屋 ●千住
一丁目/喫茶蔵 コパガーデン 焼かつつくし 椿屋 日の出
屋 前田クリーニング店 山本園 ゆうらいく●千住二丁
目/五味鳥 千住の永見 ぶつくらんど ●千住三丁目/珈
琲物語 メンズギャラリー福田 渡辺優文堂 紀伊国屋北
千住丸井店 ●千住四丁目/五門 酒の花栗屋 ●千住五丁
目/梅の湯 ラ・ルミエール ●千住大川町/ホシノ理容室
山口書店●千住寿町/大黒湯 ●千住元町/タカラ湯 モカ
●千住桜木/穂高 ●千住柳町/一やなぎ 金乃湯 ニコニコ
湯 ●千住電田町/アリス 喜田家本店 大衆割烹つばめ
●千住中居町/北嶋書店 コロラド●千住宮元町/高原書店
●千住仲町/小桜湯 まじ満 ●千住河原町/不動産のカサ
マ 千住宿歴史ブチテラス●千住緑町/魚源 オリーブ し
ずか屋 中村屋 バレット 丸安青果店 ●千住外/喜田家
五反野店 喜田家竹の塚西口店 喜田家梅島店 富士ブック
ス五反野 小泉書店 ブックスステーション小泉 ブックスひ
でき 書肆アクセス ●この他にもあります。お問い合わせせ
ください。●町雑誌千住をおいてくださるお店を募集しま
す! ご協力いただけるお店はご連絡ください。

次号 VOL18特集は... 千住の仕事

特集は変更することもあります。ご了承ください。

編集後記

●暖かくなってきまして、風が気持ちいいですね。な
んだかいいな、そんな感じの取材でした(笑) あ
楽しかった! (柏原文恵) ●ついにこのあいだ雪山のた
打ち回っていったと思えばもう春。何かあるわけでもない
のに気持ち浮いてしまおう。いい季節です。(藤井紀
章) ●先日おはじめて屋形船を体験しました。東京は本
に水に囲まれた水の町ですね。桜の季節になったら、も
う一度乗って、川の方から土手の桜を見てみたいで
(鳥山あきこ) ●今回の取材で、頼られました☆千住
の方は、あつた! *緑側でお茶をすするながら★千住
なでてる、そんな気分です。千住在住計画さらに加速し
そう☆ (伊東知子) ●最近、加速度的に時間が早くすぎ
ている気が、でも立ち止まらずにつくり周囲を見渡すこ
とが必要だ、と感じた明治の女伝取材でした。(川上佳
子) ●20周年が前に大流行したルービックキューブ。12
〜13ページの宮本さんの御主人、目隠しをして全面そろ
えられるそうです。見せてもらいたかったなあ。(武居
厚志) ●今回は目隠しさんの眼の前で、奥さんを見る一と
いう経験をしました。撮影中にやたらつかつかう目隠しさん、
広げた新聞から一時も眼をそらさない目隠しさん。写真に
写ったのは、そばにいる目隠しさんへのシャイな表情でし
た。館又☆★*・春も近づき、千住のまちもいつ
もの年より楽しくウキウキした感じに見える。でもふと
考える、まちが、人が発展するためには、変わらなけれ
ばいけないこと、変えてはいけないことがあるんじゃない
か。それが何なのかこれから先もずっと丁寧に考
えていこうと思う。(なかだえり) ●生まれてばかりの
赤ちゃんの動作は、まぶたの動きにいたるまでスクリーモ
ーションで、驚くほど優雅です。さまざまに誕生の季節、
誕生の素晴らしさを、ゆっくりにじっくり楽しみたいと思
います。(E)

千住応援広告を募集しています

町雑誌千住

- VOL. 1 千住の祭
- VOL. 2 銭湯めぐり
- VOL. 3 飲み処食べ処
- VOL. 4 千住宿を遊ぶ
- VOL. 5 千住の餅菓子屋
- VOL. 6 映画文学の舞台となった千住前編
- VOL. 7 映画文学の舞台となった千住後編
- VOL. 8 千住手仕事職人の世界
- VOL. 9 千住手仕事職人の世界 千住の年中行事
- VOL. 10 ネコの眼路地歩き 千住の年中行事
- VOL. 11 さいちのめりえ 千住の年中行事
- VOL. 12 千住の魚河岸
- VOL. 13 荒川 PART1
- VOL. 14 ランチ PART1 遊廊があったころ
- VOL. 15 ランチ PART2
- VOL. 16 江戸四宿

バックナンバー販売店

アサヒ書店
笠間産業
仁寿堂薬局
ぶつくらんど
渡辺優文堂
北嶋書店
高原書店
丸善がある北千住ルミネ店
書肆アクセス(神保町)

町雑誌千住は、千住・町・元氣・探険隊が母体となって発行されていますが、
応援会員の皆様のご協力、販売いただいているお店のご協力...と、町の多くの皆
さんと一緒につくり上げている雑誌です。皆さんの応援参加をお待ちしています。

- 購読応援会員 年会費 3千円以上 (各 2冊 3回配本・送料、手数料込み)
- となり組応援会員 年会費 6千円以上 (各 4冊 3回配本・送料、手数料込み)
- 心意気応援会員 年会費 1万円以上 (各 5冊 3回配本・送料、手数料込み)
- 法人会員 年会費 3万円以上 (各10冊 3回配本・送料、手数料込み)
- 心意気応援会員は紙面でお名前を、法人会員は社名他をご紹介させていただきます。
- 2口以上のご協力、500円からのカンパも大歓迎

会員になっていただける方はお近くの郵便局から下記までご入金ください。入金確認次第、
会員登録させていただきます。名前、郵便番号、住所、電話番号のご記入を正確にお願いします。

【郵便振替口座】00140-4-103836 (町雑誌千住編集室)

会員になってくださった皆様ありがとうございます

足立区観光協会	あやめ寿司店	石原 捷恵	一 初	石川 義夫	伊藤隆太郎
上木 恵子	うなぎ千寿	(有)裏方家多聞堂	奥乃丸伸之助	紙 谷 衛	笹木美奈子
鯨 岡 亘	久保田生花店	栗田田鶴子	喫茶 蔵	金 蔵 寺	坂本税理士事務所
塩島 莞爾	清水 正雄	新日本百年茶	鈴木 尚利	スペースエイド	千住ファーマシー
千住本氷川神社	高見澤康夫	鳥 真	虎谷 恭子	中島 勝正	野田 征子
堀内 延浩	松田季美子	マツマル	柳原ぼん太	波多野 純	宮田 一男
酒のモトハラ	よしだや	吉田 忠司	若林登紀子		

(敬称略、順不同)

コミック3万冊ゆったり80席
まんが喫茶
営業時間 平日AM10:00~PM11:00
日祭日AM10:00~PM10:00
TEL 03-3879-7532
イトーヨーカ堂となり柏光社ビル4F

槍かけ松最中
お茶屋 千住
なか井
電話 (3882)10011002
北千住駅東口前

東武旭町歯科医院
削らないのに白い歯になれる
TEL 3888-3971
北千住駅東口
足立区千住旭町4-10

人が好きです...この街が好きです
不動産のことなら
YAMAZAKI なんでもご相談ください
(有)山崎ハウジング
足立区千住1-18-4
TEL 3882-2324 (代)
http://www.yamazaki-h.co.jp

カンパをしてくださった皆様 ありがとうございました
ご協力くださった皆様 ありがとうございました

町雑誌「千住」 VOL.17 2004年 4月発行
発行 千住・町・元氣・探険隊 〒120-0044足立区千住緑町2-33-23TEL 03-3870-7055
編集 町雑誌千住編集室 〒120-0034足立区千住3-52 TEL&FAX 03-5244-2158
編集人 大野順子 舟橋左斗子 (郵便振替口座) 00140-4-103836
STAFF 取材・原稿・写真/伊東知子 柏原文恵 川上佳子 熊谷永浩 ケント・ダール 武居厚志
鳥山咲子 館又将文 藤本伸次郎 特別協力/安藤義雄 石坂満 デザイン協力/鈴木玲子 高橋康子
イラスト/なかだえり 協力/板橋陽子 稲葉あや子 大江明俊 大野清士 原島陽子 藤井紀章 山崎正樹
千住・町・元氣・探険隊HP: <http://1010tankentai.fc2web.com/>

本誌掲載記事・写真・イラスト等の無断複写(コピー)・複製・転載を禁じます。

北千住マルイ おかげさまでオープン。



OIOI 北千住マルイ

〒120-8501 足立区千住3-92 ☎03 (5244) 0101

営業時間 午前10:30 ▶ 午後8:30

